



筑紫女学園大学リポジット

A Study on Expressive Art of Modern Chinese
Short Stories and its Social Significance :
Centering on Anthology, Liang Sao

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/175 |

中国現代微型小説の表現芸術と社会的意義についての一考察

作品集《亮嫂》を中心として

石 其 琳

A Study on Expressive Art of Modern Chinese Short Short Stories and its Social Significance

- Centering on Anthology, Liang Sao -

Kilin SEKI

前言

近年中国語圏の社会において、微型小説の創作状況はすでに大きな文学潮流として現れていることは事実である。その創作実態をみると、それぞれの地域社会において、現代文学の一環として定着しているのではないかと考えられる。

現代において、この新興文体の創作現象の展開は、それぞれ異なる流れによって成立に至っているのである。中国大陸地区では、1981年「上海文芸出版社」が発行した雑誌「小説界」によって始めて「微型小説」の名称が使用され、誌上には作品が発表される専用面を開設して積極的に主導された結果、広範囲に社会大衆の創作意欲がかき起こされたのである。その後、鄭州「百花園出版社」から同じ文体として「小小説」という専門誌が発行された。一層社会大衆の創作意欲が引伸され、創作活動が盛んになり、その結果創作に関する文学賞も設けられた。台湾地区においては、1960年代から、文学界ではすでにこの文体の作品が注目され、当時台湾で発行されていた新聞「中華日報」の副刊面で、外国の小小説作品を紹介しながら、創作の提唱をしたのである。1978年2月に至り、台湾の大手新聞「聯合報」の副刊からも、正式に「極短篇」という名称で、この文体の作品を発表する専用欄が設けられた。広範囲に創作が提唱され、翌年には「極短篇小説賞」まで設置されたほどであった。そのほかに、1970年代中、シンガポールの新聞「南洋商報」副刊、「星洲日報」副刊、アメリカの華語新聞「世界日報」副刊、タイの「世界日報」湄南河副刊も微型小説を載せ始め、海外での創作風潮も起こされたのである。

この新興文体について、上述したとおり、地域または取り扱い出版社側により、現在では主に「微型小説」、「小小説」、「極短篇」などの名称が使われている。名称こそ数通りが使用されているが、創作の主旨と形式は、世界の文学界の既成概念に従って、共通した認識を持って統一され、およそ2千字前後で短い構成となる小説体の作品を指している。上述したように、文体の名称は統一されていない。更に文学史における位置づけもまだ明確にされていないにもかかわらず、各

地において、特に文学界を超えて、大衆に完全に受け入れられ、さらに大きな創作潮流が巻き起こされ、年月を経たその累積の結果、影響力をもつ重要な文学現象に定着しつつ、同時に無視できない存在にまで達しているのである。

毎年この文体に関する創作量の統計は、数万に上る莫大な数字になっている。出版界からも、個人創作集、作家選集、年度別の作家選集など、さまざまに異なるテーマ別など多種類の作品集が目白押しに、世に送り出されている。情報社会の利便性により、作家または作品が読者の身近なところで接することができ、さらに作品についての討論の場がもたらせやすいことから、発展に拍車が掛けられている。この勢いは今後も止まることなく、さらに展開されるのではないかと考えられる。

そもそもこの新興文学が大きな発展をみたのは、当初、文学界の有識者が一般社会において、更なる文学に対する興味と創作意識を高めるため、一般人が読者であるのと同時に創作者であるという理念を打ち出したことに注目しなければならないのである。この点について、台湾の有名作家痲弦がその《極短篇美学》のなかで、1978年に聯合新聞副刊が初めて海外極短篇小説の翻訳作品を登載すると同時に、作品の募集掲示をしている。作品募集の趣旨として、編集者は「極短篇は新しい試みであり、最少の文字を使って、最大の主旨を表現する。読者は数分間に、ひとつのストーリーを受け入れ、感動と啓示を得られるのだ。」と説明を加えている。この専用欄を開設したその時期には、社会が文芸に対する冷淡な情緒があり、この新興文体のような精簡の形式を通して、創作の風潮を引き起こそうと考えたのである。よって、この新興文体に対する創作意識の高揚は、多少とも文学を普及させ、展開させるねらいがあったのは事実であろう。この念願的意図は、当時として、台湾地区だけに限定されるものではなく、中国大陸においても、文化大革命後の文学という精神食糧に対する渴きの要求がみられ、時期的に「微型小説」、「小小説」の構造と庶民性が強調された部分が時代のニーズに合致するところがあったため、社会の受容が容易になり発展につながったのである。そしてこの背景は、上述した台湾での状況と重層の部分もあったのではないかと考えられる。

さて、この新興文体の進展実態に関して言えば、創作に携わる人が多いことにより、現在出版市場に出回っている作品数は、毎年万篇以上あるといわれている。有力な出版社は、このジャンルに関して、専門雑誌も多数発行している。その上出版社各自の編集担当者が基準をきめて、作品を選別し、多くの選集を作り出している。たとえば中国大陸では、「中国作家協会創研部」によって、毎年度編選された年度別の《微型小説精選》集がある。台湾ではこの新文学ジャンルの提唱に力を入れた聯合新聞副刊編集部から極短篇の選集が数多く出版されている。ほかに聯経出版社からは全國民創作のスローガンを掲げた《新極短篇》が連続で出版されている。当然このほかにさまざまな出版社によって、これらと同類なものまたは違った主旨を持ったテーマの選集も相当数が出版され、市場にあがっている。こういった盛んな出版現状を見ると、新文体を新たな文学ジャンルとして展開させる当初の目的は達成されたといえよう。だが、このような流行的創作風潮を穩健に定着させ、よりよい創作環境を保つためには、作品の質と作者自身の造詣能力が重要視されるばかりではなく、このような新興の文体を文学として、社会的な位置づけと意義を新たに規範化し、理論化することが必要視される。さもなければブームとその興亡は当然表裏一体であることが考慮されねば

なるまい。

本論は、これまで述べてきた実態と背景を基盤に、この新ジャンルの文体の発展過程において、実質的問題として、中国現代社会における文学的位置づけと存在価値をより高めるため、作品の表現芸術と社会的存在価値を重要視せねばならないと考えている。この点について、実際に作品を取り上げ、その作品を検討しながら、創作表現の芸術性を考察したい。更にこの新文学ジャンルの作品と創作が持つ社会的意義を探究し、明らかにしたい。

本論の進め方としては、まず実際に作品に触れながら、検視する必要があると考える。そして漠然的に多数の作品を散漫に検討することを避けるため、この新文体の文学を多方面において、具体化された内容がよいではないかと考え、現在中国で微型小説にかかわりの深い「百花洲出版社」から発行された作品集《亮嫂》を取り上げ、上述の問題点を考察したいと考えたのである。

一 作品集《亮嫂》について

ここで、まず本論が取りあげたい作品の情報について、説明したい。

作品名：《亮嫂》（《微型小説選刊》系列精華本に収録　（家庭巻）

出版社：百花洲文芸出版社　2002年

主　編：鄭允欽

作品を検討する前に、この《微型小説選刊》系列精華本作品集の性格と編集主旨の理解のために、その由緒をまず説明しておきたい。

この作品集の編集主旨について、その「出版前言」に次のような内容の説明がなされている。

微型小説の発展は、20世紀80年代からすでに年間に万篇以上が創作されている。90年代に入り、更に創作数が増加し、この出版社が発行している《微型小説選刊》も隔月刊から月刊に変更されたことによってもその隆盛さが知れる。だが年数を経るうちに、《微型小説選刊》の収録数が膨大になり、結果読者が集中して、全面的に微型小説について理解できるように、1997年末までの作品から《微型小説300篇》を選刊の精華本として、刊行したのである。しかしその後、変わらず創作量の多さに追いつかない状態が続いている。そのうえ、出版市場の調査によれば、興味の異なる読者にとって、当然需要の種類も違うという事実が判明したのである。そこで百花洲出版社は、新たな発想に基づき、読者のニーズに応えようと、90年代中期より2001年末までの作品を対象に、それぞれの内容と特徴により、新たに6分野の作品選集にしたのである。その6分野とは「哲理」、「ユーモア」、「風刺」、「情愛」、「家庭」、「幻想」である。そしてそれぞれの選集に、題名を別につけ、その題名は、各作品集の中から、最も意義あると評価された代表的作品名を題名と決めている。編集形式は読者の理解と鑑賞の便宜を図って、多数の作品の最後には簡単な批評文が加えられている。この6分野の作品集の題名と代表作の作者名の詳細は、以下である。

1．哲理巻　　題名：「丸の正方形」　　代表作の作者：侯徳云

- | | | |
|----------|--------------|------------|
| 2. ユーモア巻 | 題名：「毒殺できない犬」 | 代表作の作者：陳永林 |
| 3. 風刺巻 | 題名：「蛻変」 | 代表作の作者：劉国芳 |
| 4. 情愛巻 | 題名：「甘酸っぱい愛情」 | 代表作の作者：海飛 |
| 5. 家庭巻 | 題名：「亮嫂」 | 代表作の作者：孫方友 |
| 6. 幻想巻 | 題名：「生死回眸」 | 代表作の作者：蔡楠 |

ここで本論が取り上げたい作品集は、「亮嫂」作品を題名にしている「家庭巻」である。

二 作品「亮嫂」を取り上げる理由について

前章において示された分類からも理解できるように、6分類にしたのは、そもそもこの新ジャンルの創作に当たって、どれも不可欠な重要な創作主旨と要素があると考えられる。そこで、なぜこの家庭巻「亮嫂」を選んだのかを説明したい。それにあたって、以下この新ジャンルの文学を特別必要がなければ、統一した形で、「微型小説」の名称を使用することにしたい。

本論の目的は、微型小説表現の芸術性と社会的意義についての研究である。前言で説明したように、当初文学出版の出版者側が、微型小説の読者層を広げるため、社会の一般大衆に対して呼びかけ、特に強調された点は、「全員が読者であると同時に創作者でもある」ということであった。読者層に対して、更に一步進めて、創作者にもなろうという意識を高めたいことで、積極的に主導した結果、創作者の層が確実に広がったのは事実である。多くの読者、作者が共通して、作品に興味を持ち、感動または啓示を得られることは、作品の質が精練させる重要な原動力になり、社会的存在意義と価値も増加するであろう。以下は、この作品集を選んだ理由について、2点に分けて説明したい。

その1 先ず以上述べた内容を踏まえて、6分類のテーマを検視してみたい。「哲理」、「ユーモア」、「風刺」、「幻想」について、小説の表現として、各々の作品の独立的な主旨として創作を行う際、ある意味で必要条件と考えられるのだが、創作するに当たって、その内容に絶対的に欠かせない条件であるとは言えないであろう。「情愛」について、男女間の情愛的部分に限定するのであれば、たとえ人生にとって永遠のテーマとは言え、視野の範疇が束縛され、狭く制限されてしまうことがあり得るだろう。

その2 以上の分類で、創作者も読者も共通して、もっとも身近で、生活に密接に関連する、そして世間の誰でも避けて通れないテーマは、言うまでもない「家庭」という範疇ではないかと考えられる。「家庭」といっても、家庭内を中心として、親子、家族、夫婦、兄弟などさまざまな人間関係があるだけではない。それぞれの家族が外部の人間たちと絡み合い 相互に営む生活の舞台上で、多数の人生のドラマが語られ、描写されるのである。この作品集に含まれる上述の現実的一般性が強いことは注目すべき点だと考えられる。さらに小説の表現技法を考えると、「家庭」がテーマであっても、その表現芸術に風刺的、ユーモア的、哲理的、幻想的を描写することも可能である。以上の2点を理由に、他のテーマと比較して、研究対象として好材料ではないかと考えたのである。

三 作品集「亮嫂」の表現芸術について

ここで先ずこの作品集の大体的構造を説明したい。作品集に収録された作品数は80編で、全作の作者が異なっている。作品の全てが中国大陸で出版された《微型小説選集》から集められたものではあるが、中でも台湾の新聞「聯合報」で発表された作品を《微型小説選集》に収録された後、今回また《亮嫂》選集に収録されたものもある。作品は全て家庭というテーマの問題を中心として描かれているが、大別すると、夫婦間の問題が最も多く占められている。次には親子関係のさまざまな問題を題材にしたものである。以下は、具体的に作品を取り上げながら、微型小説の表現芸術を見てみたい。そして実際に作品数が多いため、方法として、代表的に一作または断片的に内容を取り上げることにしたい。今回特に家庭というテーマで最も触れることの多い二つのテーマ「夫婦関係」と「親子関係」の作品を取り上げることにする。

(1) 夫婦関係を描写する作品について

作品集でこの問題に触れたものは、最も多く占められているが、繊細に夫婦愛を描写する内容、夫婦間の信頼関係についての内容が多く見られるのである。ここで主に2作を取り上げながら、それぞれの作品の特徴を検討し、創作の表現芸術について考えてみたい。作品の内容について、基本的に摘録訳する形で取り上げる。

作品1 鍵

若い夫婦の結婚後、互いに給料とボーナスについて共有財産と考えるが、各自の臨時収入で、たとえば原稿料などについて、個人のものとして、それぞれで管理することと決めた。よって、夫婦別々に自分だけの引き出しができ、それぞれが鍵を管理していた。

2年間二人ともこのルールを守り、何も問題はおこらなかった。しかしその後夫には急に妻の引き出しの中身に対してある考えが生じた。お金以外にもしかしたら別に「秘密」があるのではないだろうか、妻の引き出しが見たくなってしまったのだ。しかし妻の鍵に対する管理が厳しいので、なかなか念願がかなわないのである。

ある日出勤した妻がハンドバッグを家に忘れてしまった。夫はすぐに妻のバッグから、一本の鍵を見つけ出した。それはまさに妻の引き出しの鍵であった。そこで夫は急いで妻の鍵の形を紙に複製した。妻は慌てて家に戻り、かばんを持ち出した。夫は急いでその鍵を複製し、妻の引き出しを開けてみた。が、妻の引き出しには少々の紙幣と一本の鍵があるばかりであった。その鍵は夫の引き出しのスペアー鍵だったのだ。

この作品は、典型的な微型小説の表現手法をとっているといえる。夫婦互いに相手に対する不信は表面には出さずに、「鍵」という「具象」を通して描写している。最後の部分で、夫が妻の引き出しから自分の引き出しの鍵を見いだしたとき、どれだけ驚いたかは想像できるであろう。だが、同時に自分も妻と同じように、相手のことを疑心暗鬼に思っていたことに気づくだろう。この作品

は夫婦関係の表裏にある「実」と「虚」を淡々とあぶりだしている。そして、夫婦間の信頼関係の重要性を訴えたのであろう。

選集では「作品1」と同じ表現手法の作品は、数多く見られる。「鍵」の作品のほかに「妻の客」、「文旦」、「ボタン」、「夢ごと」、「記載事項」、「愛の物語」、「良い夫」、「条件」などの作品がある。これらの作品の特徴として、題名になっている「物」、「こと」は、それぞれの作品中で、重要な役割を果たしている。具体的な「物」あるいは「事柄」を通して、夫婦関係が具象化されて、主人公が互いの心境と本性を反映させるのである。この点について、もう少し例を挙げながら説明したい。

例1「妻の客」

妻の出張後の留守中、不測の来客があった。それは妻の昔の恋人であり、妻の写真を思い出としてほしいと要望され、夫は自分たちの結婚写真をわたした。そこで妻が帰宅。出張先で昔の友人を訪ねたが、友人が留守で、奥さんに友人の写真を一枚ほしいと言ったら、結婚写真をくれたと不満そうに夫に話した。夫がみれば写真に写っている男とは妻が留守中に尋ねてきたその人だったのだ。

この作品は「鍵」によく似た技法を使っている。意識的に「偶然性」を取り入れ、「客」が鏡のように具象化され、主人公たちの潜在的に持つ心の狭さと醜さを映し出したのである。このような風刺的表現は、微型小説の芸術的手法としてよく見られる。

例2「文旦」

文旦は昔の恋人との愛情の証であり、恋人の優しさの思い出でもあった。作者は主人公である彼女が、夫の前に、自分の手で文旦の皮をむく動作と文旦の皮が剥かれた様子を悉く繊細に描写している。そこに昔の恋人の優しさは、「文旦」を剥く動作から映し出され、剥かれた文旦のみずみずしさは、当時の自分の姿でもあり、純粋な恋心の表現であった。

例3「ボタン」

妻はボタンが背中についている洋服を着るたびに、夫に手伝いを要求していたが、新婚当時から子供ができるまで、夫はそのボタンの留め役を嫌がらずに務めていた。ある日夫がその役を面倒だと思い、その洋服の着用をやめるよう妻に伝える。ある日妻が一人で出張した際、その洋服を着用して出かけ、そして着用して戻ったのであった。夫が誰にボタン留めを頼むのかと疑惑の目で妻を問い詰める。妻の出張は若い同僚の男性も一緒だったと勝手に不貞を疑い、最後に夫婦喧嘩により、別れる始末になった。が、夫の妹に妻のその洋服を試着させたところ、女性一人で簡単にボタンをとめることができたのだ。慌てた夫は妻にまたその洋服のボタン留め役を務めたいと伝えるが、もうその洋服は着たくないと言った妻から返事が来たのだ。

微型小説芸術表現によく使う手法の一つは、「物」、「事」を具象化したところで、それを使って、断片的なドラマにつなげて展開させるのである。その上繊細な技法で、瞬間的場面を刻み込むように鮮明に描写することでさまざまな意象を現し、主旨を訴えるのである。「例2」と「例3」のように、ストーリーの場面こそ少ないが、断片的な場面では、具体的物（文旦とボタン）を使って、象徴的に夫婦関係の長い日常を表現している。「例2」での文旦という具象は、昔の恋人の優しさ

を思いだす。終始一つの場面設定の中、時に力強く文旦の皮を剥く動作の描写によって、現在の生活または夫に対する不満を噴出させている。「例3」でボタンの留め役は、夫婦の絆を強くしてくれる甘えの言い訳だったであるにもかかわらず、年月がたてば、情熱が冷めるばかりでなく、強い絆さえも疑惑に変わってしまうのである。たかが洋服のボタン留めと思うかもしれないが、されどそれが夫婦二人にとって人生の大曇天返しのカギだったのである。

作品2 朝食

主人公の彼は、長い間、毎朝家で手作りの朝食を妻と息子に食べさせる習慣を持っており、当然自分も毎日欠かさずに家で家族と一緒に朝食を取っているのである。妻は彼同様に会社勤めをしているし、息子は学校に通っている。家族3人は朝食後に各自で出かけるのではあるが、彼が作る朝食は良心的でとって手の込んだものであったが、それにはある理由があった。

彼は仕事が忙しいと、会社に寝泊りするのを理由に、妻の了解を得て、毎晩家に帰ることなく、朝になると朝食を作るだけのために、帰宅するのである。表面では神経衰弱症の妻に対する思いやりであると彼は強調するが、実際のところ彼には愛人がいるためだったのだ。毎晩愛人と楽しみ数時間寝てから、必ずシャワーを浴びて、目覚めるようにして自宅に帰るのである。このように長年彼は妻と愛人の間で息抜きをしながら、この生活を楽んでいるのである。反面妻に対して罪悪感があるのも事実であるから、彼はこころをこめた豊富な朝食を提供することに専念しているのである。つまり夜の生活の放漫程度は、朝食の内容であらわされている。ある日愛人は一度彼と朝食を共にしたいと責めるのであるが、彼は怒り喧嘩になってしまった。結果、逆に愛人にせまられて気持ちが高まり、その夜は激しく抱き合い、熟睡してシャワーを浴びるのを忘れてしまい、朝には時間通りに帰宅することができなかったのである。

彼は自分を責めながらタクシーで会社へ向かうが、自分の体の上半身と下半身意識のバランスが崩れ、仕事にやる気がなく、やはり妻と子供に申し訳ないと思い、家路へと方向を変えて急ぐのだが渋滞がかかり、時計はもう昼の12時半を指している。ようやく午後一時半に彼は帰宅したが、家の中はカーテンも開けられておらず、暗くて静まりかえっている。彼は暗闇の中台所にたどり着き電気をつけた。が、灰色のスーツを着た妻と制服を着てカバンを胸にしっかり持っている息子が空っぽの食卓の前にぼっと座っているのである。彼は妻の視線を避けながら息子に聞いた、

「母さんとお前はなぜ会社と学校に行かなかったのかい？……今はもう午後2時半だよ」

「私たちはまだ朝食をとっていないだよ。」と息子が言った。

外はもう日が高く昇っているが、彼の家ではまだ夜が明けていなかったのだ。

この作品は、もと台湾の聯合新聞に載せられたものである。作品の後についている簡単な批評文には、夫婦関係において、「不倫」を描写する内容は最も数多いのだが、この作品は、確かに独特な作品だと考えられると称賛している。ごく普通の人間、普通のテーマ、普通の事柄、普通の会話をつなぎ合わせ、普通のように、普通ではないインパクトの強い内容の作品に仕上げたのが、批評

文に考えた「独特である」という意味ではないだろうか。

人間が生きる上で、本能的に絶対に欠かせない「食」と「性」をうまくテーマに取り込んで、おかしく、悲しくさせる内容の作品であろう。作者がこの作品に最も重要な事柄である「朝食作り」を具象化し、彼自身の心境は、どうして、どのように、毎日欠かさずに朝食を作るのか？を生き生きとした描写で全編の流れを主導し展開させている。常識はずれのような意外な結末を二つの短い「普通」の会話を通して、強くその場面を想像させて、読者にショックを与えているのである。寝坊した彼の焦りから彼にとって自己再認識の契機となったストーリーの展開の中、夜の生活以上に、彼の精神生活の支えになっていたことや、また彼自身も自分が朝食を作ることが、どれだけ自分と家族の重要なきずなであったのかを、新たに認識できたのである。この作品の構成には、流れとして、人の心を刺す残酷に仕立てられているように思われる面もあるが、反面、豊富な手作り朝食は深い情愛的表現であるとも考えられるだろう。

(2) 親子関係を描写する作品について

この作品集では純粹に親子関係を描写するものは、それほど多くはない。親子愛のほかに、家庭教育のしつけの問題などもテーマになる事が多いように思われる。ここでは主に2作を取り上げて、検討してみたい。

作品1 精神

息子とケンタッキーフライドチキンを食べに行った。しかし一杯の飲みものと肉一つだけしか注文するつもりはなかったのである。ここにくるのはもう3ヶ月も前から息子から言われ、それまで何度もねだられた結果ではあった。いきそびれたのは母親が贅沢するじゃないと応じなかったのも一因であろう。しかし今日は親子2人で店に入って、予定通りに注文し、テーブルに座ったのである。するとそのテーブルの上一枚の新聞が広げてあり、新聞を取りはらった息子はその下に18元のお金があったと親に告げた。明らかに誰かの忘れ物であろう。

「どうしょう？」と母親が言う。

「先生に預ける。」と息子が言った。

「そうだね。でないと誰かに取られてしまうだろう。」と母親が微笑みながら言った。

息子はお金を手にとってしまいこんだ。母親は思わず気にしながら、周りを見まわした。彼女の心臓はドキドキして、気持ちは揺らいでいた。本当はこの18元をそのままねこばしたかったのであるが、幼い息子のてまえそれはできなかった。

翌日学校行く前、母親に「まだ朝食のお金はくれてないよ？」と息子が言った。

「小銭がないから、立て替えてね。」と母親が返事を。

「僕のポケットにあるお金は、朝食買うのに足りないだよ。」と息子。

「昨日ケンタッキーのあのお金がまだあるじゃない？」

「いや、あの金は先生に渡すものなんだよ。」と息子が言った。

母親はカバンから10元を取り出して、息子に渡ししながら、「帰ってから清算するよ。」と。

夕方帰宅して息子が宿題をやっているのを見て、すぐに18元の事を聞いたが、もう先生に渡したと息子は答えたのである。

翌日、仕事中に学校の先生から電話が来た。ケンタッキーの店長さんが息子と母親に会いたいとの用事だった。店長さんは、18元は、彼がわざと置いたお金で、もし誰かがこのお金を「とどけ」すれば、ご褒美として188元を差し上げる。そして学校で表彰してもらい、獎金として手渡したいと。

母親は自分が遊ばれたような気持ちで、「この獎金は要らない。私たちはたまたまこの店に行っただけで、私は息子に失望をさせたくないだけで、息子の父親は2ヶ月前出稼ぎに出た……私はまだ仕事があるから。」周囲から拍手が起こった。母親の体が熱くなった。息子の頭を撫でながら「母さんは仕事行くからね。」と言った。仕事が終わって帰宅したら、息子が嬉しそうに先生から明日朝礼の名誉旗手になると伝えた。母親は「母さんも嬉しいよ。」と息子の肩を軽くたたいた。その後ケンタッキーの店は人気上々で、お客さんが常に満席だったそうだ。

18元という具象をとおして、母親が自分自身の欲に対する葛藤が、心の中で波乱万丈のように、起伏したのがよく表現されている。小銭がおつりかをテーブルに忘れるのは、誰も疑わない普通の出来ごとである。しかしまさか故意に人の心を試すための罠とは、ストーリーの意外性として、読者に強いインパクトを与えやすいであろう。

子供に対して、親は随時に教育する立場にあり、その責任を負わされているのである。しかし親はいつでも完璧的な心の準備が出来ているわけではないのは当然である。作者は子と親の対話を丁寧に描写することで、親心の矛盾を表現している。母親の焦っている心境を説明また弁解しているように、父親が2ヶ月前に出稼ぎに行った事実を、思わず口走ってしまった描写は、そこまで人に話す事はないと思っても、言い訳を自分に聞かせて、心の底に潜んでいる醜い貪欲を隠そうとする振る舞いであったと思われる。そして何もなかったようなそ振りをみせ、「母さんは仕事に行くからね」と、その場から逃げだしたような難しい心境を、作者はさりげなく表現している。

建前と本音をどう表現するかを、誰しもがよく課せられる難題であろうが、この作品は、常にある人間の理性と欲との戦いを、もっとも「18元」という途轍もない「金銭感覚」をユーモアに描写していると考えられる。

作品2 雨宿り

夫と離婚した彼女は、5歳になる息子が離婚判決で、夫に渡された。理由は彼女が勤務先をリストラされたばかりで、子供を扶養する能力はないと判断されたからだ。実家には帰れない、彼との結婚は父親の反対を押して結婚したものであり。そして父親の反対を押して、彼と離婚をした。父親の反対で子供の扶養権を彼と争った。親権の裁判に負けてはいたが、彼はしばらく彼女が子供を扶養できるようにしてくれた。最後に父親にあったとき、父親から「この子を養うなら、うちと縁

を切る。自分でもまだどう生計を立てるかわからないのに、また荷物を増やそうとする！」と罵られたのだ。

80円で小さい古いプレハブの家を借りて、クリーニング屋をはじめたが、苦しい生活のままで一冬が過ぎた。実家には帰ってないし、父親も会いに来た事がない。ある日母親がこっそり会いに来てくれた。午前中の10時にやっと水とナンだけで朝ごはんを食べる娘たちを見て、「今の時間は、父親が家にいないから、家に帰ってご飯を食べなさい。」と誘われた。子供がおいしくご飯を食べている姿を見て、彼女は涙がとまらなかった。「これから毎日9時半に子供を連れてご飯を食べに来なさい。父さんは毎日この時間に公園へ、人が将棋しているのを見に行くから家にいないのよ。もし来ない時は、私が持っていくわ。」と母親が言ってくれた。その日から、毎日9時半、家に子供を連れて、ご飯を食べに行った。母親の言うとおり、父親にあったことはなかった。彼女の自尊心からは許される事ではないが、しかし子供がだんだんと元気になった様子を見ると、やめる事ができなくなったのだ。

ある日大雨が降って、もう父親はこんな雨の日には公園にはいかないはずだと思い、実家に行かなかった。しかし子供はやはりおいしいおばあさんの料理を食べたいとねだるため、仕方なく、連れて行くことにした。実家の近くについて、母親が2階のベランダから周囲をみまわしているのが見えた。そして彼女たちに手を振って、早く上がりなさいと、父親は家にいないからと。「父さんは外に行くのが習慣になって、こんな雨に日でもまた公園に行ったのよ。これから雨の日も来なさい、父さんにあう事はないよ。」と母親がいった。しかしその日ご飯を食べて帰る途中、突然父親に会いたい気持ちがわいてきた。離婚してからまだ一度も父親に会ったことがないからだ。

公園の近くの鉄の柵があるところに、一人の老人が傘を差して、じっと立たずんでいる。とても寂しそうに感じられた。こどもはすぐに「おじいさん」と叫んだ。避けようとしたが、もう父親は自分たちに近づいて来たのだ。彼女はなんとと言ったらいいのかわからずに涙だけがとめどもなく流れた。「今後家に帰ってご飯を食べるとき、こそこそしなくてもいいんだ、わしもこんな雨の日まで外に行かないといけないから…」と暖かい声で言った。

この作品は、「雨宿り」を題に、全ての愛情表現と感動を一気にこの場面で締めくくったのである。母親の娘に対する愛情は、こまごまと描写されているのと反対に、父親の愛情は静黙で、頑固で、厳しいものだとして小説の中では印象付けられている。しかし、「一人の老人が傘をさして、じっと立たずんでいる。」という場面を描写するだけで、娘の自尊心を傷つけないため、雨宿りをガマン強くする父親の姿と親子愛が、数倍も数十倍も読者に感動をあたえるであろう。これも微型小説ならこそできる表現であろう。

微型小説はそもそも短くてなければいけない。内容描写について、どれを書きとめるのか、どれを省くかの選択は、よい作品になるかどうかの最も重要な鍵である。この作品は娘の結婚、離婚と父親の反対の具体的理由などは全て省かれて、娘のマイナス的イメージは詳細に説明出来ないため、娘の行動について、物語の設定に理屈がつかない部分もあるだろう。しかし最も真髓な部分を

小説という形でまとめられるのが、「微型小説」の本来の存在価値であろう。

親子関係を題材にした作品は他にも「母」、「息子の手紙」、「行方不明者探しの広告」、などがあるが、ここでは紙面の関係で割愛したい。以上家庭と言うテーマに基づいて、《亮嫂》作品集から数編を取り上げながら、微型小説の表現芸術について検討したのである。次の章では、この作品集の題として選ばれた作品「亮嫂」を取り上げてみたい。

四 作品「亮嫂」が選集の題名に選ばれる理由と意図について

そもそもこの作品集で、一番注目されるべき作品といえ、やはり題に選ばれた「亮嫂」であろう。しかし全作品集が当然家庭と言うテーマに絞られたため、まず家庭にかかわる諸問題から、代表的作品の数編を取り上げ、その内容を検討しながら微型小説の表現芸術について検討したのである。ここで新たに作品「亮嫂」をとりあげたのは、この作品がなぜ一番注目されたのかを探りたいからである。そしてこの理由において、編集側の意図とは何だったのかを考えてみたい。ここで検討する前に、まず作品内容のあらすじを提示したい。

作品「亮嫂」

工場で働く亮嫂は、豊満な体で難しいにんにく処理の仕事を下請けして、収入を得ながら生計をたてている。夫は町の工場で働いている。以前では、亮嫂自身が工場労働者の妻として、大変誇りを感じていたのだが、最近では景気が悪化し、生活するだけの給料しかもらえなくなったのである。そこで、亮嫂は家で畑を耕やし、豚や羊を飼ったりして、家計のやりくりをしている。夫には、田舎に戻れば、また農民戸籍に戻されてしまう恐れがあるため、町に残ってもらい、仕事を続けるようにしたのだ。夫は亮嫂があまりにも大変な負担を担うので、何度も田舎に帰ろうと考えたが、亮嫂からは、「人間は気骨をもって頑張らなくては」とかたく反対されたのである。

亮嫂にとってにんにく処理の収入は決して多くはないが、家で仕事ができるし、収入もそう悪くはないから、都合のいい仕事だと紹介してくれた周方達さんに感謝している。周さんとは中学校時代から互いに好きで恋人のような仲だった。文化大革命時代には亮嫂のお爺さんが周さんのお爺さんからいじめを受けた事を聞き、嫌になり、周さんに対して敬遠するようになったのであった。それで毎回工場へにんにくの材料をもらいに行くときも周さんの目線を避けていた。が、逆に周さんはいつも親切に声を掛けてくれるのであった。夫の事、子供たちの勉強はどうかと聞かれることもあった。しかし周さんが優しくすればするほど、余計亮嫂を不安な気持ちにさせてしまうのだ。

あるとき工場で「この仕事はきついだらう？」と周さんから話しかけられた。周さんは近年有名な企業家に変身し、威風堂々とした気風は圧倒されるようだった。「今日町で君のダンナさんについて、もしよかったら、私の工場で営業マンとして働かないかと聞いたところ、彼は君の同意があればと答えたのだがね？」と亮嫂に気遣いながら尋ねた。亮嫂はしばらく考え込んでしまったが、結局首を振ったのであった。そして「あの時（文化大革命時代）は私が悪かった、本当にあなたに申

し訳ないと思ってる」と亮嫂は周さんに謝った。「気にするな！もう忘れたよ！」といい、周さんは亮嫂に再度同意を求めたが、しかし亮嫂は意地を張ってうんと言わなかった。

しばらくたって、夫の工場では景気がよくなり、収入も増え、生活状況が大きく変わったのである。亮嫂も仕事の休閑期に入り、町へ出たついでに夫の工場をのぞきに行ったのである。亮嫂は夫の工場を見ながら、「やはり道は自分で開かないとね」と夫に誇らしく話したとき、夫は「この工場は誰のものが知ってるかい？」と亮嫂に問うた。

「誰の？」と亮嫂はすぐに聞き返した。

「周方達だ」と夫。

「え？」と亮嫂は驚きのあまりに、目を丸くぼかーんとして、言葉をなくした……

この作品集を全体的に検視すれば、「亮嫂」は表現芸術などについて、それほど特色がある作品とはいえない。主人公亮嫂の人間像、物語の構成と流れの展開について、微型小説の作品においては、一般によく見られる芸術的表現と言えるであろう。この作品が「家庭巻」の題として選ばれる理由、そして編集側がこの作品に込めた思いと意図はなんであろうか。それを検討するに有力な材料として、「亮嫂」作品の後に付いている短い評論を見ることにする。評論は概ね次の内容である。

経済潮流を目前に、「下崗女性」の役を借りて、愛情、婚姻、性などを題材に、粗俗的に描写する作品が多くみられるが、平凡な作品が多い。この作品に注目したのは、亮嫂のような品格のある女性が、「下崗」労働者の妻として、この金と欲が横流する時代のなか、物質的誘惑を3度も拒否し、その気骨と意地をもって、自尊自愛の初心を守ったと確信した点である。しかし作者はそこで終わろうとしなかった。疑問点をのこし、この社会的現実を目前にして、人生を直面させ、自分がお金持ちの傘下で生き残っていることを亮嫂に新たに認識させたのである。

この評論から、「亮嫂」がこの作品集の題として選ばれた理由が伺えるのではないかと考えられる。内容でもっとも評価されたのは、亮嫂の人格である。「亮嫂」は2000年《微型小説選刊》に登載された作品である。当時の中国社会は、経済的変動が激しく、「下崗」が大きな社会問題になり、小説の材料として格好なテーマであった。「亮嫂」もその時代潮流に乗った作品といえるであろう。当時においては、かなり時代を反映した現実性の強い内容だったに違いない。更に主人公亮嫂の人間像を非凡に描写しながらも、社会の弱者的存在である現実を冷酷に露呈させたのである。この点について、彼女が命掛けで守ろうとした自尊心は、結末の簡単な3行の夫婦の会話で一撃され、崩壊されてしまった描写から理解できるであろう。作者は亮嫂をひとつの社会階層の象徴として描いている。当時は経済の熱潮が爆発的に展開する中、それに追いつかずに翻弄された人々は、大勢いたのである。同じ作品集の「息子の手紙」の内容もまさにその現れであろう。出稼ぎの息子から毎月家の両親宛に送金がかかる。両親はその金額の多さに驚き、息子が悪いことでもしなければ、こんなに大金が手に入る訳がないと息子のことを疑い始め、手紙を無視し、お金も受けたがらないままであった。この両作品の問題意識は同じではないと考えられる。当時の中国社会の現実では当然ありうることでありう。「亮嫂」が注目された理由は、その女性像も重要視せねばならないが、しか

しその誇らしい人間像には、当時の時代的要素と社会的要素が基盤になっていることは無視できないであろう。近年、中国の経済発展状況において、経済活動の普及により、全体的に生活意識の変化が確実に見られるなか、果たして現実に新たな亮嫂は出現するだろうか疑問であろう。

作品「亮嫂」の結末について、作者は意図的に、亮嫂に現実社会を直面せねばならないと再度認識させ、亮嫂、彼女の夫、周方達のような人たちに、新たな課題を投げ出したと上述の評論文の最後には付け加えられたのである。これは作者の訴えであると考えられるし、また編集側の意図でもあると考えられるのだ。ようするに、「亮嫂」が作品集の題に選ばれた重要な理由と条件は、主人公亮嫂の人格を主張するほかに、作品にかかわるその「時代性」と「社会性」が重要視されているのである。この点に関して、微型小説の大衆性と社会的意義との関係について触れてみたい。

五 微型小説の大衆性と社会的意義の関係について

近年文学離れ現象が続く中、微型小説と言う新ジャンルの文学の隆盛状況は、文学界においても重視すべき現象である。しかし微型小説の発展過程において、よく議論されるのは微型小説が大衆文学ではないかという問題である。この問題について長年議論はあるものの、結論がでないのが現実である。

微型小説の創作に当たって、大衆性が捨てがたいのは、微型小説の全民創作主義によるなごりであり、この文学が社会に広がるもっとも強い基盤条件でもあるのだ。詳細に前述してきたが、微型小説は生活の瞬間を捉え、生活の意義をみいだすための創作である、それが哲理であったり、風刺であったり、ユーモアであるなど、決して一部分の階層に所有する文学ではない。忙しい生活の中で誰でもが簡単に読めて、そして共感できるものでなければならない文学であると強調されてきた。その大衆性を創作の要素として、その創作条件に融合することは小説の社会性を高め、社会的存在意義を増すためである。大衆性であるから、その価値が衰えているという見方は、議論する余地があるのと同じように、大衆文学の性格があるために、その地位が下がり、文学的価値がなくなるとはいえないであろう。上述「亮嫂」の作品が微型小説集「家庭巻」の代表作に選ばれた理由と背景を考えれば、この点を問題視すべきではないことが明らかではないかと考えられる。

そもそも微型小説と大衆文学の関係をマイナス的方向でつなぎ合わせたのは、その文体と創作の実態に疑問が生じ、問題化されたのである。ようするに、文体的に短いものが原則として限定されたため、書きやすく、読みやすく、文学性に欠け、使い捨ての通俗文学になりかねないと懸念されたのである。字数が少ない分、現代社会のライフスタイルのニーズに応じやすい部分はあるが、現に多く受け入れられているところもこれが理由であることは否定できない。しかし、社会において、創作する意欲が起らなければ、文学の発展もなくなるであろう。創作の質を高めるには、社会全体で啓発する努力をすべきであろう。現に多くの有力な出版社、文学界より様々な微型小説などの選集を世に送り出されていることは意義ある動力であり、重視すべきではないだろうか。

確かに、微型小説の開拓と普及にいたるまで、出版界、文学界などさまざまな分野において、努

力があるのは事実である。その努力のもとで、微型小説という新興文学ジャンルの発祥より、まだ20数年に過ぎないが、すでに50人あまりの創作者が中国作家協会会員に吸収され、数百人の創作者が地方（省・市）の作家協会に入り、作家としての創作活動が行われている。また実際に数十篇の微型小説という新興文学の作品が大学、高校、専門学校の教材内容として選ばれているのである。このような実績は、微型小説と言う新興文学ジャンルとして、その社会的地位と価値は無視できないであろう。この文学は、大衆性のあるなしにかかわらず、その社会的意義は、一層明らかに示されたのではないかと考えられる。

終わりに

《亮嫂》という微型小説の作品集を通じて、その文学的要素として、作品の表現芸術性を検討したのである。そして一つの作品集が担う社会的存在意義を「亮嫂」という作品が《家庭巻》の代表作に選出された理由を探求し、微型小説の大衆性や社会的意義が確認できたと思う。

社会において、ある文学に関心が集まれば、読者も創作者が多くなるであろう。創作をするために、社会または個人の問題に対して関心が高まり、観察する行動も増加するであろう。創作を通して、社会に対しての問題が提起され、一般の人々に共感を与え、社会にとってもプラスになるのではないかと考えられる。現に微型小説という文学ジャンルとしての特徴を考えれば、このような役割を期待するのは、それほど難しい問題ではないと思われる。「全員が読者であると同時に創作者でもある」今後、微型小説という文学ジャンルとして文学界において、基盤を固め、更に発展するための不可欠な条件とは、質を高めると同時に、その重要な特徴を生かし、読者と創作の両方の立場から、社会的意義を重視するということであろう。

主な参考資料

- 「小小説的写作与欣赏」 丁樹南譯 純文学出版 1967
- 「極短篇の理論与創作」 張春榮 爾雅出版社 1999
- 「極短篇美学」 痲弦 爾雅出版社 1992
- 「小小説300篇」 楊曉敏 郭昕 長江文藝社 2003
- 「微型小説面面觀」 江曾培 百花洲文芸出版 1993
- 「現代人的小説世界 - 微型小説写作芸術論」 劉海濤 上海文芸出版 1994